

第 1 章 入間市の概要

第1章 入間市の概要

1. 市の概要

面積	44.74 km ² 〔東西幅 9.3km 南北幅 9.8km 海抜最高点 203.5m 最低点 58.3m〕
人口	総人口 150,367 人 (2013 年 1 月 1 日現在) 世帯数 61,162 世帯 (//)
	昼間人口 129,766 人 (2010 年国勢調査データ) 流入人口 25,623 人 流出人口 45,668 人 昼夜間人口比率 86.6%
	転入人口 5,472 人 (2012 年) 転出人口 5,752 人 (//)
鉄道	【鉄道路線及び駅数】 西武池袋線 4 駅 (武蔵藤沢駅・入間市駅・仏子駅・元加治駅) ※なお、市境にある稲荷山公園駅も市民は利用している。 JR八高線 1 駅 (金子駅)
道路	首都圏中央連絡自動車道 1 路線 国道 4 路線 (16 号・299 号・407 号・463 号) 県道 9 路線 市道 4,509 路線

埼玉県西南部に位置する入間市は、都心から 40km 圏にあり、東は所沢市、西は飯能市と東京都青梅市、南は東京都西多摩郡瑞穂町、北は狭山市にそれぞれ接しています。

市域全体は、海抜 60 メートルから 200 メートルのややなだらかな起伏のある台地と丘陵からなり、市東南端と西北端には、それぞれ狭山丘陵と加治丘陵があり、市域の約 10 分の 1 を占める茶畑とともに緑の景観を保っています。市の東北部には、狭山市・入間市域にまたがって入間基地があります。また、市の西北部には荒川の主流である入間川が流れ、中央部に霞川、南部に不老川がそれぞれ東西に流れています。

鉄道では、西武池袋線の入間市駅・武蔵藤沢駅・仏子駅・元加治駅と JR 八高線の金子駅があり、主要道路では一般国道 16 号をはじめ 299 号・407 号・463 号の 4 路線と県道 9 路線があります。さらに 1996 年 (H8) に首都圏中央連絡自動車道が開通し、入間 IC が国道 16 号に接続したことで、広域的に利便性が図られた交通網が形成されています。

主な産業のうち、農業では県下最大の狭山茶の産地ですが、サトイモや露地物野菜類の生産も盛んです。工業では、伝統ある繊維産業をはじめ、昭和 40 年代からの工業団地造成等による電気、機械工業を中心とした幅広い分野があり、近年は先端技術産業など付加価値の高い業種の企業も増えつつあります。商業では、平成以降入間市駅周辺が整備され、中心市街地の商業的な核として位

置付けられています。さらに、近年は郊外型大規模店舗の出店が多く、2008年(H20)に圏央道入間IC近くにオープンした大型アウトレットモールには、広域から多くの来場者が集まり、新たな入間市の顔ともなっています。

近隣市である所沢市、飯能市、狭山市とは平成2年から「埼玉県西部地域まちづくり協議会(ダイアプラン)」の協定を結んでおり、公共施設の相互利用やイベントの共同開催など、さまざまな面で連携を図っていることも大きな特徴です。

将来都市像として「香り豊かな緑の文化都市」を掲げ、首都圏にあって変化に富んだ自然と、それに育まれた伝統文化と、新しい文化の融合によるコミュニティが年々広がっているのが入間市の特色といえます。

図表 入間市と周辺市



2. 市の沿革

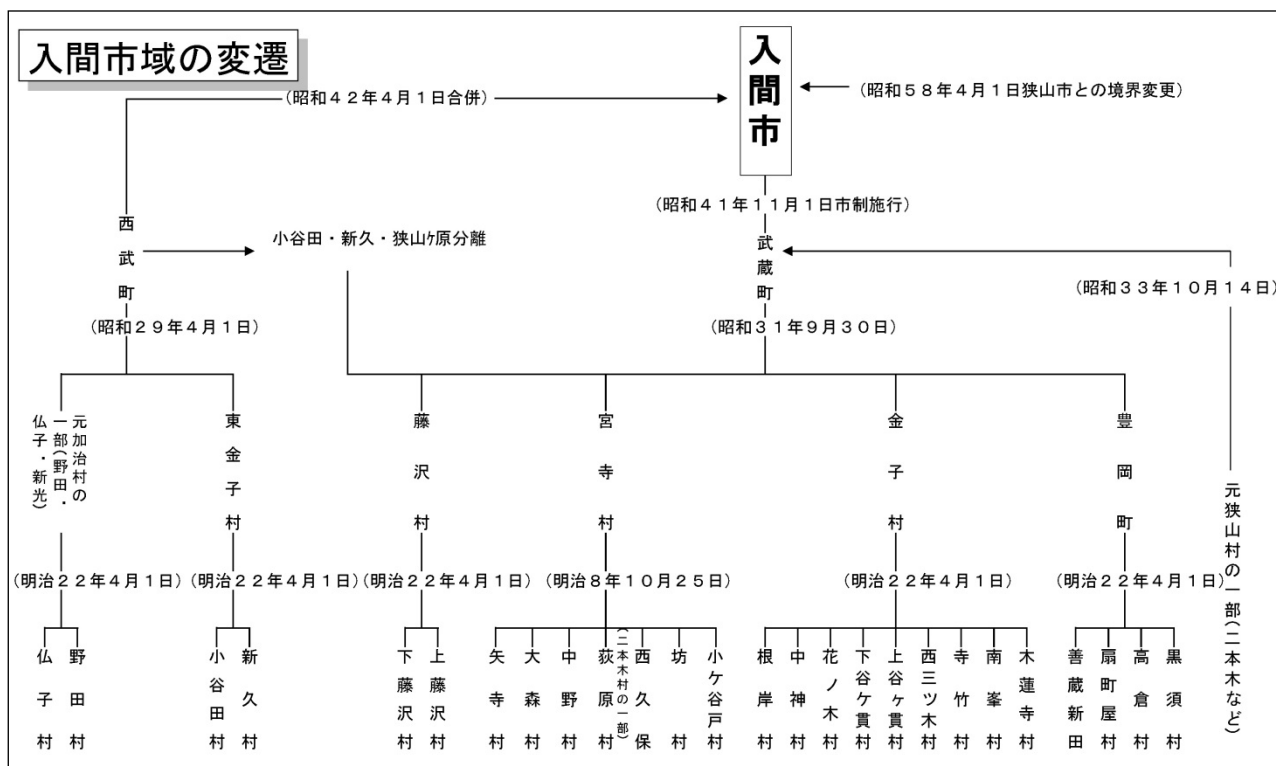
江戸時代、現在の市域は天領、藩領、旗本領と支配が入り混じっていたものの、経済活動は活発化しました。特に、江戸時代末期の扇町屋には穀物市や木綿市が立ち、地域経済の拠点として栄えました。

明治時代に入ると、現在の入間市の原型となる町村（豊岡町、金子村、宮寺村、藤沢村、東金子村、元加治村、元狭山村）が成立しました。また製糸、織物など繊維工業のめざましい発展があり、狭山茶業が盛んになったのもこの時代でした。

第2次大戦後、町村合併が促進され、1956年(S31)9月30日、豊岡町、金子村、宮寺村、藤沢村及び西武町の一部（旧東金子村）が合併し、武蔵町が誕生しました。その後、1958年(S33)10月には元狭山村の一部が合併し、1966年(S41)11月1日、埼玉県で25番目の市として「入間市」が誕生しました。さらに、1967年(S42)4月1日、西武町との合併により、現在の市域が構成されることとなり、首都圏近郊都市としての行政基盤が確立されました。

ただし、成立当時の入間市においては求心力のある中心市街地と呼べるような地区がなかったため、合併前の旧町村においては、しばらくの間は周辺地域との交流が盛んで、市としての一体感を持つことが大きな課題となっていました。

図表 市の沿革



出典：入間市統計書 平成25年版

3. 各地区の成り立ち、特長

地域区分は、旧町村ごとの豊岡、東金子、金子、宮寺・二本木、藤沢、西武の6つの地区に分けて見ることが一般的なため、ここでは市内全域を6地区に分けて、それぞれの成り立ち、特長、人口、公共施設の整備状況等を説明します。

豊岡地区

市の中心的な地区として、都市基盤整備と都市機能の充実が進んでいる地区です。特に、入間市駅から扇町屋2丁目にかけては、デパートや、映画館・レジャー施設等の入った複合ビルなどが立ち並び中心商業地としてにぎやかな街並みを形成しています。

この地区は、江戸時代から江戸・川越・八王子・青梅・秩父などを結ぶ交通の要衝の地であり、市場としても栄えました。明治時代には全国有数の製糸会社「石川組製糸」が隆盛を極め、今も河原町に残る「西洋館」はその迎賓館として活用された建物です。

1889年（M22）、扇町屋村・黒須村・高倉村・善蔵新田が合併して豊岡町が成立しました。1938年（S13）に陸軍航空士官学校が開校し、戦後はそこがジョンソン基地となり、1958年（S33）には航空自衛隊入間基地となるなど、この地区は「基地の町」でもありました。

1978年（S53）以降に、基地跡地は国からの払い下げが始まり、そこに小・中学校、高校、図書館、産業文化センター、公団や県営住宅、県営公園などが整備され、近接している市役所、市民会館などとともに、市の公共的な中心地となっています。

東金子地区

加治丘陵南麓の霞川沿いに集落が形成されてきた地区で、古代の窯跡群があり、古くから人が住みついていた地区です。地区の南部、金子台（武蔵野台地）には関東一の面積を誇る茶畑が広がり、金子地区と並んで狭山茶生産の中心地となっています。

昭和30年代から40年代にかけては、加治丘陵の一角に八津池団地、入間台団地等が造成され、人口が急増しました。南部の台地上には昭和40年代に造成された武蔵工業団地があり、1996年（H8）圏央道が開通してからはアクセスの良い工業団地として、流通関係の倉庫や事業所が増加しました。

金子地区

加治丘陵南麓の霞川沿いに集落が形成された地区で、中世には武蔵武士金子氏一族の拠点ともなった歴史のある地区です。地区の南部、金子台（武蔵野台地）には関東一の面積を誇る茶畑が広がり、その一角には、狭山茶の品種改良や生産方法の研究・指導などを行う埼玉県農林総合研究センター茶業研究所もあり、東金子地区とともに文字通り狭山茶生産の中心地となっています。また、江戸時代には農閑期の機織りが盛んな地区でもありました。

地区の北部に位置する加治丘陵では、秩父山地から連続している丘陵として、オオタカ、ムササビ、コミヤマスマシなど、貴重な動植物を見ることができ、丘陵内にはハイキングコースや桜山展望台なども整備され、市民のレクリエーションの場となっています。また、加治丘陵東側の雑木林

にはカタクリの群生地があり、貴重な自然が残されている地区でもあります。

生活圏域としては、さまざまな面で、隣接する青梅市との結びつきが強い地区でもあります。

宮寺・二本木地区

宮寺地区は、中世村山党の一族である宮寺氏の拠点となっていた古い歴史のある地区です。一方、二本木地区も江戸時代、日光脇往還の宿継場として栄えた地区でした。

南部には狭山丘陵が広がり、今でも集落・屋敷林・雑木林・農地・社寺林などがのどかな風景を作りだしていて、その一角には「さいたま緑の森博物館」も整備されています。この森は、アニメ映画「となりのトトロ」の舞台となりました。さらに2009年（H21）には入間市が協力をして、この地区の稲荷神社にまつわる伝説をもとにしたアニメ映画「ホッタラケの島」が制作されました。

現在では、北部に位置する狭山台地区は工業団地や住宅地が整備されており、博物館、大学、高校、小中学校、公民館などがある文教地区にもなっています。

宮寺は、バス路線が小手指方面に連絡していることもあり、生活圏域としては所沢市との結びつきが強い地区でもあります。一方、二本木は、元狭山村が東京都瑞穂町と入間市に分かれた地区で、今でも強い結びつきがあります。

藤沢地区

鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』に源頼朝が狩りを行った記録のある原野だった場所ですが、昭和30年代以降は大規模な工場の進出や角栄団地等の大規模宅地開発が行われ、さらに、武蔵藤沢駅を利用して都心への通勤・通学が便利な地区であることから、近年は大型集合住宅や大規模店舗が立ち並び、人口が急増した地区です。

まもなく終了する大規模な区画整理事業により、大きく街並みが変貌しており、快適な都市環境の住宅街となっています。

西武地区

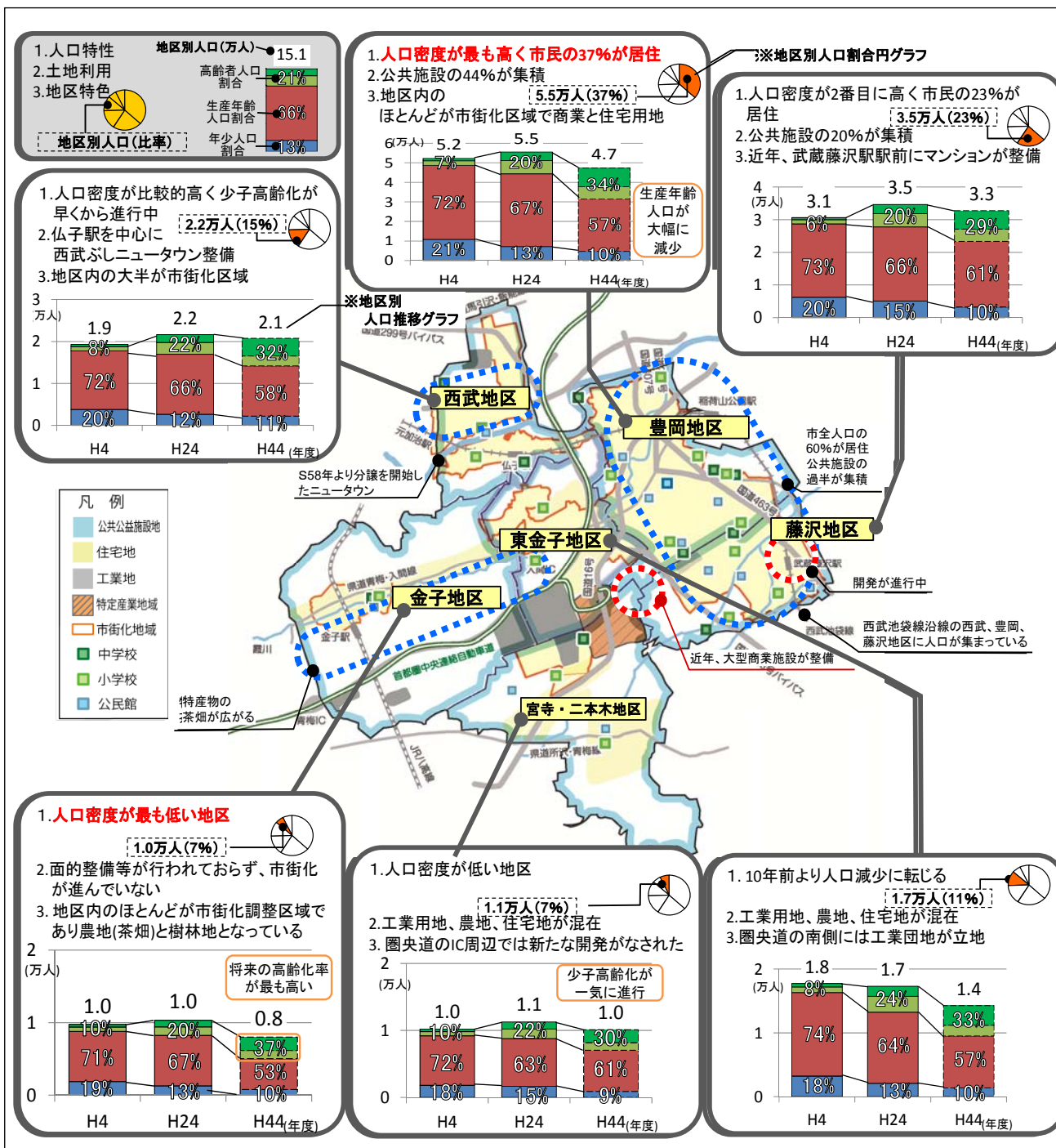
地区の中央を入間川が流れ、その南側が仏子地区、北側が野田・新光地区であり、いずれも中世の武蔵武士、金子氏・加治氏の拠点として栄えた歴史のある地区です。

江戸時代には「野田双子織」に代表される縞織物生産が盛んになり、そうした織物は川越を通じて当時の江戸に流通をしていました。さらに、明治以降は機械化された繊維産業地帯に成長し、昭和初期に開業した「平仙レース」は日本を代表するレース工場として、海外輸出なども行っていました。

この地区には仏子駅、元加治駅があり、昭和50年代終わりごろから西武ぶしニュータウンの分譲が始まるなど、都市近郊のベッドタウンとして人口が増えた地区でもあります。

一時期、隣接する飯能市に含まれていたこともあり、現在でも生活圏域としては飯能市との結びつきが強い地区でもあります。

図表 地区の概要



出典：住民基本台帳

4. 市民の1日の流出入状況

(1) 市民の1日の流出入状況

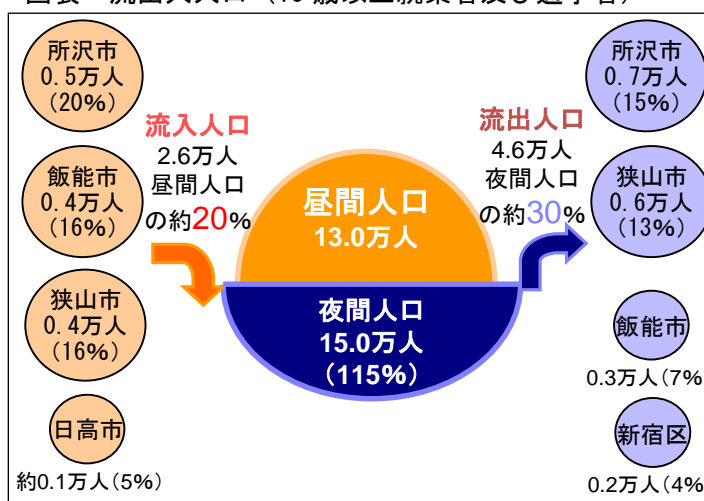
本市の1日あたりの流出人口を見ると、市民の約30%（45,668人）が昼間は通勤・通学等で市外に流出しています。流出先として多いのは、所沢・飯能・狭山などの近隣市で、流出人口の約35%を占めています。また、西武池袋線を利用して都心に通勤・通学している市民もおり、東京23区に流出しているのは流出人口のうち約29%となっています。このような状況から、現在は近隣市への通勤通学が多く、都心への通勤者は相対的に少なくなっていることがわかります。

一方、昼間人口の約20%（25,623人）は市外からの通勤・通学者で、流入元として多いのは所沢・飯能・狭山などで、流入人口の約5割を占めています。

このことから、現在埼玉県西武地域まちづくり協議会を組織している所沢市・飯能市・狭山市・入間市は市民の行き来が多くあり、生活圏・文化圏も共通であることが推測できます。

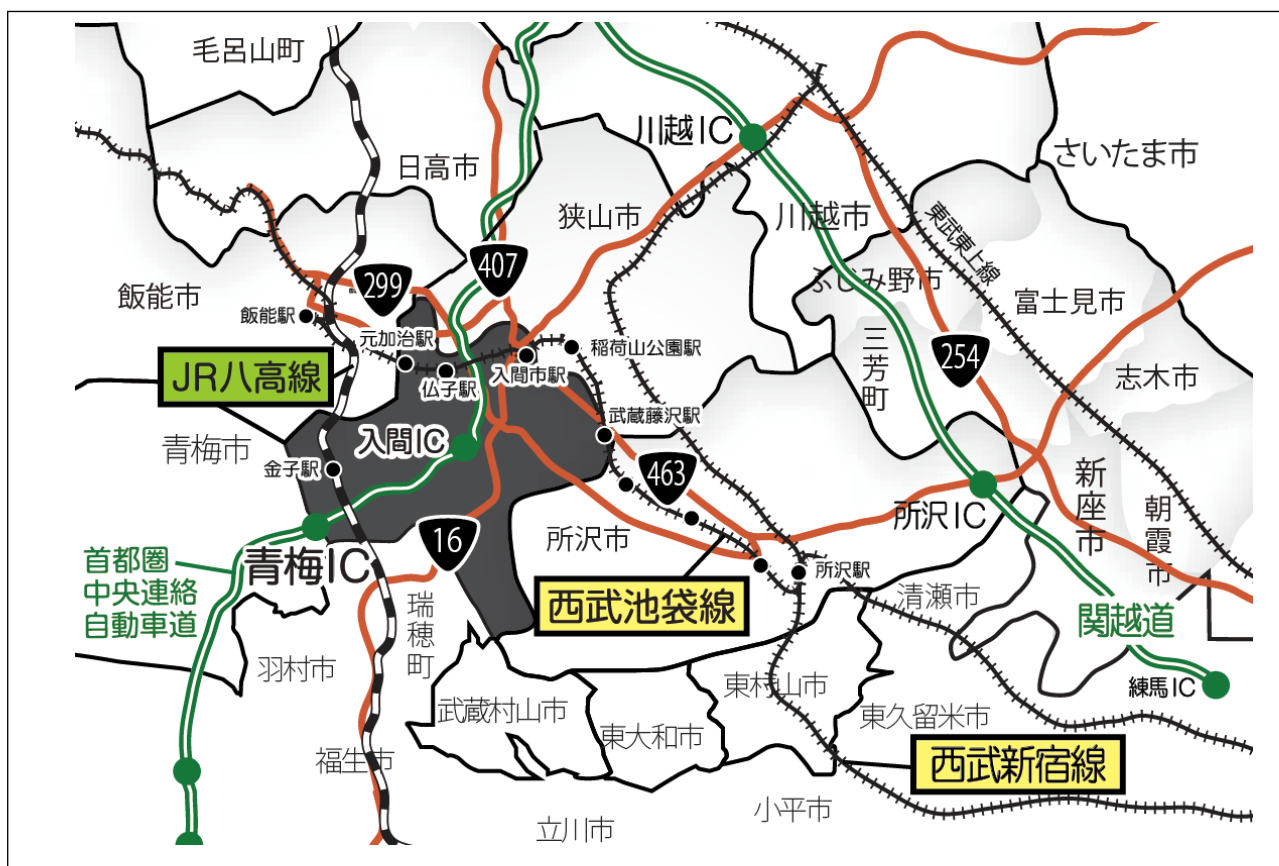
現在でも、一部の公共施設の相互利用は行われていますが、このような流出入状況を見ると、今後公共施設の再整備を図る中で、将来的には4市間の公共施設の統合なども考慮すべきであると考えます。

図表 流出入人口（15歳以上就業者及び通学者）



(出典:平成22年国勢調査)

図表 鉄道路線図



(2) 流出入人口と昼間人口の関係

2013年（H25）1月1日現在の地区別人口を見ると、豊岡地区が55,282人、東金子地区が17,100人、金子地区が10,237人、宮寺・二本木地区が11,243人、藤沢地区が34,872人、西武地区が21,633人となっています。

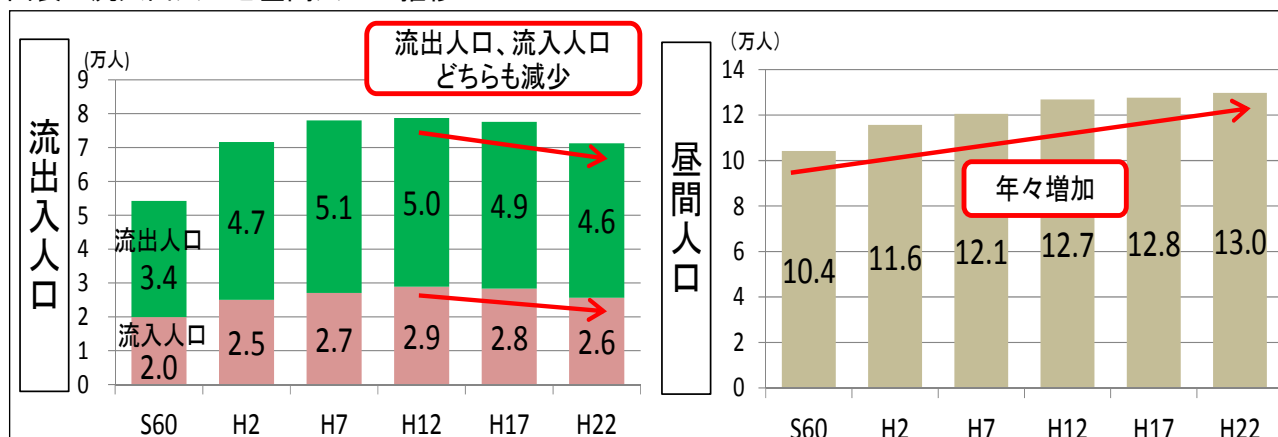
1Km²当りの人口密度は、市全体では3,361人、最も高い豊岡地区が7,193人、以下東金子地区3,035人、金子地区835人、宮寺・二本木地区1,258人、藤沢地区6,640人、西武地区4,353人となっています。

地区別人口の特長としては、郊外地区である金子、東金子、宮寺・二本木地区は、人口は少ないが変化も少ないという傾向があり、一方人口の集中している豊岡、藤沢、西武地区は、長期的に見た場合、人口及び年齢構成の変化が大きいという傾向があります。

西武池袋線の駅（武蔵藤沢駅・入間市駅・仏子駅・元加治駅）がある藤沢、豊岡、西武地区は2013年（H25）1月1日現在の人口が111,787人と全人口の約74%を占めています。2012年（H24）の各駅の乗降客数を見ると、入間市駅（豊岡地区）の1日平均乗降客数が35,089人で最も多く、武蔵藤沢駅（藤沢地区）22,688人、仏子駅12,596人、元加治駅6,901人（いずれも西武地区）となっています。一方、JR八高線の金子駅（金子地区）は、4,220人と西武線各駅と比較すると少ない乗降客数です。このことから、西武線沿線は通勤の便が良いため人口が増加してきたことがわかります。

流出入人口をみると、いずれも減少しており、特に就業者の流出入人口の減少傾向が目立ちます。その一方で、昼間人口は増加傾向にあります。その原因となりうる大規模宅地開発が直近にないことから、リタイア世代の増加が推察されます。それにより、今後公共施設のニーズにも変化が出てくると考えられます。

図表 流出入人口と昼間人口の推移



出典：昭和60年～平成22年国勢調査

5. 地域区分に対する考え方

各地区の特徴や人口動態等を踏まえて、今後の公共施設再整備に向けた地域区分の考え方について、4つのプランを提示します。

- ①旧町村として分けられる6つの地区（歴史的なつながりが強い地区）
 <豊岡／東金子／金子／宮寺・二本木／藤沢／西武>
- ②生活圏域として分けられる9つの地区（生活基盤が共通で福祉計画などで区分されている地区）
 <豊岡第一／豊岡第二／豊岡第三／東金子／金子／宮寺・二本木／藤沢第一／藤沢第二／西武>
- ③中学校区として分けられる11の地区（子どもや保護者の繋がりが強い地区）
 <豊岡／東町／黒須／向原／東金子／金子／武蔵／藤沢／上藤沢／西武／野田>
- ④地区公民館の区域として分けられる13の地区（地域住民の結びつきが強い地区）
 <扇町屋／黒須／高倉／東町／久保稲荷／東金子／金子／宮寺／二本木／藤沢／東藤沢／藤の台／西武>

この地域区分のうち、公共施設の再整備を検討するには②または③がふさわしいと考えられます。

①の地域区分で再整備を考えた場合、学校・公民館・保育所などの公共施設を統合するには範囲が広く、利用者人口のバランスも悪いためエリア一括で統廃合などを検討するのは難しいと考えられます。

一方、②③は生活圏域、子どもや保護者の活動・交流の範囲として定着した地区であることから、徒歩又は自転車で利用が可能であり、利用者人口も平準化されると想定できます。また、今後の超高齢社会の到来を考えると、より市民が活動しやすいエリア設定が必要となります。

さらに、今後再整備を行う際には、公共施設の複合化についても検討すべきであり、その場合は人口バランスの取れている②の地域区分で捉えることがふさわしいと考えられ、今後は、このプランを軸に公共施設の再整備を進めるのが望ましいと考えられます。

図表 地域区分図

